



河原俊昭・山本忠行・野山 広 編著

『日本語が話せないお友だちを迎えて』

—国際化する教育現場からのQ & A—

今、外国籍の子どもたちが激増している。日本にいる外国人の数は現在20万人。40年前の数字と比べるとなんと3倍を越える。人の移動は、当然新しい文化ももたらす。全国で1番外国人が多い新宿などでは外国に行かなくても中国、韓国、東南アジア、中東などの料理店もある。新たな食文化は、私たちの新たな生活の潤い、楽しみ、興味などをもたらす。そのためには外国人の子どもたちが日本で安心して生活ができることが大前提である。

本書はそんな時代を見据えて日本語教育関係者が作った、子どもたちの教育課題など記した「1問1答」である。ここには日本語の語彙や文法、会話などをどうやって教えたらいいのか

A5判
232ページ
定価1,680円(税込)
くろしお出版

という直接的な質問から、「日本で目標を失っている子ども」「日本語を書くことを嫌がる子ども」など日本の文化や制度になじめない子どもたちなど、多様な課題が含まれている。本書には80を越える質問、19のコラム、そして関係する条約、ウェブサイト等、資料も付いている。

食については2つ。1つは食の安全について中国野菜の安全性に関わるもの、もう1つは学校給食に関する問題。豚など特定の肉を食べない子どもの対応などが記されている。

この本は直接これらの子どもに関わらなくても、急速に進む国際化に日本がどう対応するのか考える上での貴重な1冊である。

(善元幸夫)

読む

〈プレゼントコーナー〉毎月、10名様に当たる!

読者アンケート(98ページ)ご回答の方へ、「読む」掲載書籍や、オリジナルタログッズが当たります。どしどしご応募ください。

金丸弘美 著

『「地元」の力—地域力創造7つの法則』

A5判
220ページ
定価1,680円(税込)
NTT出版

かつて本誌連載で「食がみんなの元気をつくる!」を書かれた金丸弘美氏の近著。総務省地域力創造アドバイザー、内閣官房地域活性化応援隊地域活性化伝導師としての体験を踏まえて、イタリア、ギリシャを含む18の「地元」の食のパワーを紹介したものです。サブタイトルにある7つの法則=地元の力とは?

その一部を—。

①デザイン力: トータルな仕組みをつくる。モノを売るだけでなく、物語を売れと。②発信力: 地域にあるものが情報の力。徳島県上勝町の、和食に使う「葉っぱビジネス」の着想の話は感動的です。③知恵力: 長崎方言の“さるく”(ぶらぶら歩く)から、市民が参加して「さるく」マップを作ることが観光資源となってい

ると。④コミュニティ力: 廃校となった古い学校をレストランと宿泊施設として活用している和歌山県田辺市の例を紹介。⑤編集力: スローフード運動の発祥地イタリアの話題。古城を活用して「食の大学」をつくる例も。⑥伝統力: 江戸時代の街並が残る大分県臼杵市の例が。古い街並と有機農業の産物との相乗効果がつづられています。⑦連携力: 組み合わせれば1+1は3にも4にもなると。熊本県熊本市のレストランのようなおしゃれな病院食も。

一つひとつが具体的で、地域に根差しています。食の画一化がいわれる時代に、一読、何か救われるような思いにかられました。

(沢野 勉)

